

Porsche 356 Speedster

小型スポーツカーの雄



ポルシェ356スピードスターは、1954年から1958年まで生産された。初期物は1.5リッターエンジン、356シリーズの第二世代である356Aへと進化してからは1.6リッターエンジンを搭載するようになった。今でも熱心なファンが多い名車中の名車だ。



Vintage Speedsterが生産しているPorsche 356 Speedsterレプリカは、空冷VWビートルのシャシーにショートホイールベース化および補強を施した後、グラスファイバー製ボディを載せて造られている。現車は新品エンジンを搭載したツインキャブ仕様のニューカーで、オプション扱いとなるディスクブレーキ、オーバーライダー、ルーバー付きエンジンフードなどを装備。ボディカラーは、赤、黒、銀、オフホワイト、クリームがあり、内装色は黒、赤、タンの中から選べる。掲載協力：CAR HOUSE <http://www.carhouse.biz/>

爽快なオープンエアモータリングを提供

ポルシェの名を持つ初の量産モデルである356シリーズは、フェルディナント・ポルシェ博士が理想とするスポーツカー像を具現化したものだった。

1948年に記念すべき第一号車(プロトタイプ)として誕生した356.001は、同年の3月頃からテスト走行を開始したが、南オーストリアのグミュントで造られた創成期の356はボディがハンドメイドだったこともあり、極めて少ない台数しか生産されなかったと言われている。

接収されていたシュツットガルトの本社に戻ってから、ポルシェ社は敷地の向かいにあるコーチビルダー、ロイター社にボディ製作を依頼し、グミュント時代の生産性の低さを解消した。

1950年の春から本格的に生産が開始されたジャーマン・メイド・ポルシェ356は、細かい改良を受けながら進化していったが、そのような流れの中で、モデル・バリエーションのひとつとしてラインナップされたのが「スピードスター」だった。

1954年に登場したスピードスターは、簡素化されたシンプルな幌とサイド・カーテンを採用していたが、緩やかなカーブを描いた天地方向に薄いウィンドウ・シールドも外観上の特徴だったので、フルオープン状態でもカブリオレ仕様との違いを容易に見つけることができた。

1959年モデルでスピードスターは耐候性等を増した豪華装備のコンバーチブルDへと移行し、その歴史に幕を下ろしたが、クルマのコ

ンセプトが明確で、なおかつスタイリッシュだったスピードスターの魅力は今日でもまったく色褪せていないといえるだろう。

ちなみに、これは余談になるが、当時すでに輸出が始まっていたアメリカのディーラーからの強いリクエストを受けるかたちで、1952年に「アメリカ・ロードスター」と呼ばれるモデルが製作された。

これはカブリオレ仕様とは異なり、内張りの無い幌やバケットシート、そして、取り外しが可能で、平面ガラスによって構成されたフロント・ウィンドウなどを採用していた。また、サイド・ウィンドウも巻き上げ式ではなく、サイド・カーテンを取り付けるタイプに変更されるなど徹底した軽量化が図られており、キャビン開口部形状も独特だった。

コーチビルダーはグレイサーで、わずか16台のみが生産されたと言われているが、アメリカ・ロードスターのコンセプトが1954年に登場したスピードスターへと受け継がれたことは明白だろう。

さて、今回ピックアップした個体は、アメリカに本拠を置くVintage Speedsterが製作しているPorsche 356 Speedsterのレプリカである。

既述したようにアメリカ・ロードスターの流れを汲むスピードスターはアメリカ市場で高い人気を博したが、Vintage SpeedsterではPorsche 356 Speedsterのレプリカをすでに2500台以上も生産しているようだ。

スピードスターが稀代の名車であるが故にレプリカの注目度も高いのだと解釈できるが、名車の雰囲気や気軽に味わいたい方は、本物よりも格段にリーズナブルなコストで購入、維持できるVintage Speedsterの意欲作を購入してみてもいいだろう。

元気に走り回ってこそクルマであると考える方にもレプリカはお勧めである。